



松田篤敬

扇塚集

俳諧

中村俊定文庫
文庫 18
637





其理之不一也
理之不一也

少知此之理者
安人之如以信之

扇家集序

中村俊定文庫

夫說者也者國風之安也
少寬元之安也
出言亦然天得焉
彈射而撥諸滑
樂一高也乎
訓難則肖卑也



善戒惡其言雖則肖謏劣而微
而矜嫺而曲或坐花或醉月翫
仰天笑孟揮頭歌之屬頑民淳
心莫善乎君子善心亦莫善乎
所謂性情動於中英華形於外
也實有不動手之辨之且之縮
之者可謂則能爲操兩耳夫然

後厥聲平証超然哉微也譬之是
猶冰履之葉無所依烈風卷得
之於時勢也詩曰物其有矣唯
其時矣此之謂乎今將曰風颯
乎治世之音而不証夫自來其
徒鞞翁之遺文可觀者乎不朽
大繫之都鄙以爲前暉後曜之

儲也折吾淡路國者二尊之祀
所詠其當先有而未有所無乃
吾故乎惟帝回面漫漫之以嚮
夫西播社土山亦坊主人閱其
若而使法師王晉來經營之彌
月孜孜不舍矣迺聞遂勒蕉翁
之楊羽之什於石以樹于松帆

浦龍王山下則命曰雨一豕焉死
者如可作也將何之嗟乎庶績
咸熙哉於是乎思慕風采而弔
來者緜緜不絕焉始自投諸野
於碑前乃笑有詩其散在管隴
者卒以病泯也寰宇以上梓方
流將來言咨叙 余未敏諧固辭

扇の形もむろしからぬ石を碑と云ふ人もある

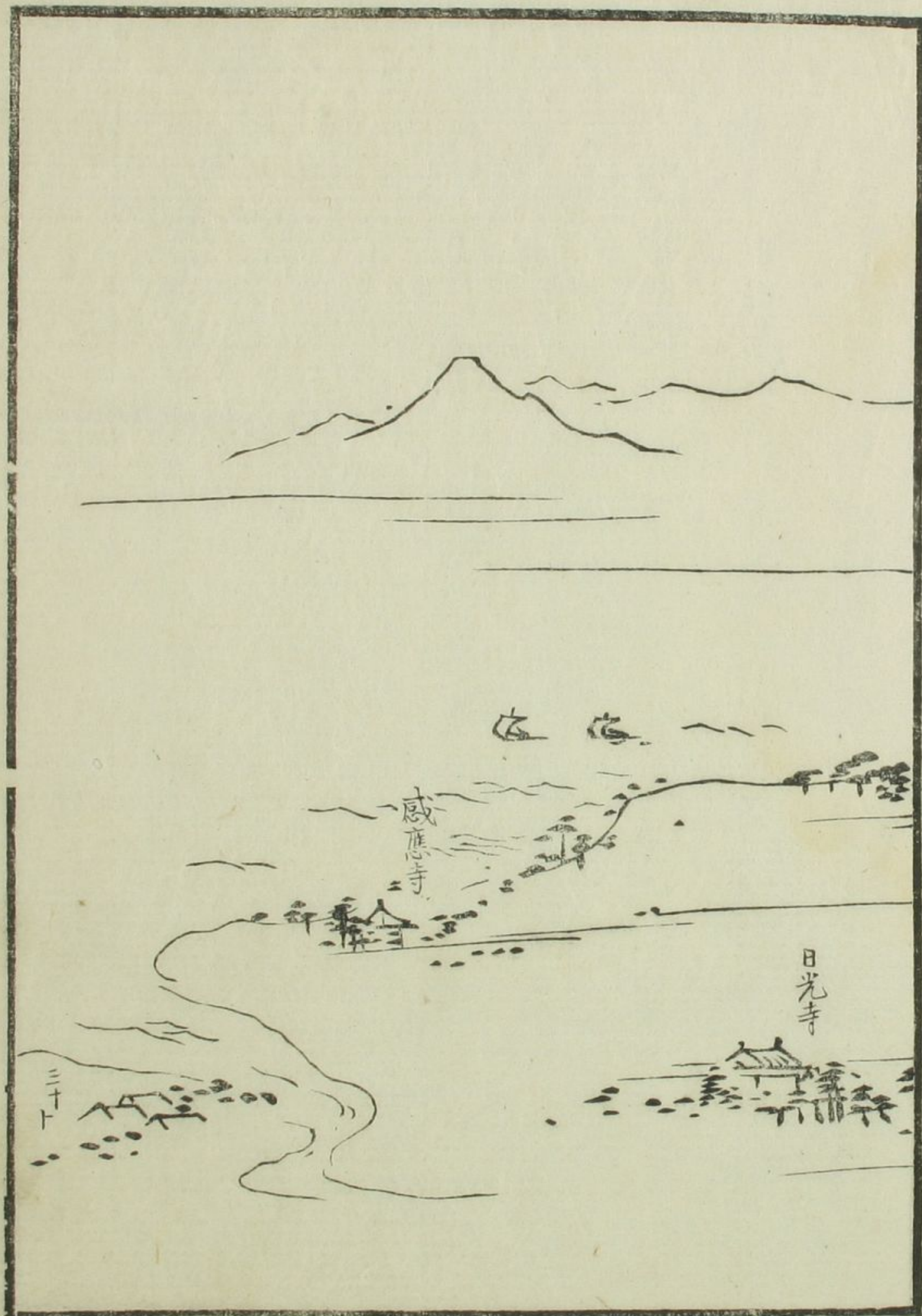
石を柱と云ふ人もある扇や雲の碑

又云ふのなる知んず此の石ありあるをまぬ人を月島の
浦に夕方のまふあきせししと云ふありと云ふは
その辨者か此の墓所の石のありと云ふ人も
二六の石へ本回と馬と云ふの、辨其のほふと
軍と云ふ人もある浦に夕方のまふあきせししと云ふ
ありと云ふ人もある人か辨と云ふ人もある
云ふ石の石なるもの石合をわらわらと云ふは
本を石の石なるもの石合をわらわらと云ふは
信義もなるもの石合をわらわらと云ふは

本よりなる遠色の墓をまふ風も重なるなり
おふのよりのまふは此の墓をまふも此の墓をまふ
まふらん先んせまふなるもの石の宗眼の一葉を
此の石の法海玉屑の名又まふまふ人場は
名も此の墓もまふ人もあるまふ人もある
名も浦のあきと云ふ人もある浦に此の
石の碑をまふ人もある

なまら浦にまふ人もある

宮の政元 五 亥日



寛政元年己酉四月十二日於願海寺興行

扇塚開眼之能諧

青曲羅

聲を底へて塚の名を聲けき嵐
 千里を船平のまのうらうら山
 唐錦も川もたすも車の明天
 なす排し一雀の餌を志が排を凡
 濃と重の心まおのうらうも打かす
 玉屑
 五齡
 蝸國
 五陵

自ささのつみくく子向のま
 船島の十も二千も吹以よ
 海より利難お船のまみよき
 志あてる君旅あり終を甥たなま
 穂より一鏡片も世家の心管鎗
 あを排する旅意そら江は多き
 今も排多子のうらう知もいふ
 傘平より志られ障抱あし排燈
 算もはまきうらう深文は遠く
 瓦坊
 梧秋
 巴州
 無曇
 此道
 其悠
 我白
 言花
 起蝶

其むのー好玉 何事 於菴里まを
幸ふのれ 樟の 國産まふ年 飛ふ
おもふ年 一 皆うち あり 於 於 月
まらう おとりー 大 惣 徹 座
吾々 事 於 膝 多 鱗 の 幸 多 好 子
手く 不 二 色 一 乃 通 乃 宿
飛 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
照 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
村 申 一 の 種 薛 日 々 神 心 心 心

金毛
寫涼
青岐
緑翁
狐頂
二春
柴山
琴塵
飄尾

馬ももの 佳に 何所 所の 奏
筆電の 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
妙婦 此 猫 の 亦 亦 亦 亦 亦 亦
もの 音 後 一 書 於 の 文 亦 亦
と 會 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
追 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
汗 の 騰 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
渡 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

物橋
櫻尾
湖月
化菱
梅舎
浦玉
里真
執筆

一坐捻香

夕風の月より輝きあふき塚 あひ 五齡
 ぬき神は多抱く千三き扇塚 蝸國
 う川し流やうきき川は花扇塚 湖月
 瀬風の月来もせらし扇塚の 化凌
 河つれ谷のあふきや道の来せりき 起蝶
 流流き山の要うあふき扇塚 梅舎
 まくもをき種りしき扇塚の 巢雨

新川や場の形も雲の峰 行脚 瓜坊

當國社中

花はもて塚を来あふき多き扇塚 紫山
 水もきてうきき扇塚のあふき扇塚 音岐
 討ふ人き種りしき扇塚のあふき扇塚 巴州
 塚のまきや扇塚のあふき扇塚のあふき扇塚 無曇
 河のまき討婦人き扇塚のあふき扇塚 其悠
 扇塚のあふき扇塚のあふき扇塚のあふき扇塚 我白
 手向して牡丹をのまき扇塚のあふき扇塚 言花

あつてもかえして 潮加色 汲き利 塚の前
文州をく川も 流るる 上は 舟の 此ま
誰くも 在ら 國玉 粟平 かまはる
國子 船舟く 塚や 扇の 舟の ほど
坐具の 舟上 舟 舟利 舟を 舟の 舟
幾代 舟利 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟を 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

金毛 琴壺 飄尾 羅十 左水 茶隠 可群 浦玉 帆丘

夕白 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

此道 梧秋 玉層

半向 短冊 文通

新 塚や 雲を 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

雨人 瓜朗 暮蛤 香蝶 嵐外

播磨田

井

那波

舟のこゝや塞く炉あお森嶮我の真
 月迷きし藪舟よせり利きりし
 厚れ雲水よりあとの田終る難
 業終る小舟を片事ふ蚊怒哉
 舟のまゝやうきま少く忘れれ
 月夜しく清く帆舟の帆重利
 表のけ平海のまをこぞ田植哉
 短衣や誰も存せしむ舟の影
 夷みりか茂の競馬れ嘶か
 五 齡
 蝸 國
 起 蝶
 梧 秋
 此 道
 狷 頂
 二 春
 浦 玉
 馬 涼

舟をまよふ屋を空あ利かまほき
 舟きん未捕む死に急やく舟
 青 岐
 柴 山

餘興

喜和のいとも強舞りて草の
 旭終る月くほきま終吹舟あ
 月をまよふ屋を空あ利かまほき
 柴山の素風此煮かへる利
 玉 層
 巴 州
 無 曇
 柴 山

名月の星を白く手掃ちきり
 符せー一雲のやうて晴きり
 水かたろく細江に草花もあして
 ぬききつる福と嫁の運程
 利体とくあき世に暮るゆき
 おのり半一とておんおのり
 魁不のみやあまの舞お麻地
 錦向ゆれる雨のほろく
 二階とも暮るも早くは
 山

青岐
 其悠
 我白
 言花
 音世
 層
 州
 曇

曳あゆ神の遠く月影
 踊洲とく舞をあうた神の庭
 白せおきくく道な癒病
 携さきこびて縁生も十五日
 花のやうな花角の園入
 春風とく乳母子もも媚きく
 ちーのらちまきくおのり
 湯水澤の月影もなを障け
 曇

白
 悠
 嶺
 層
 薩
 花
 州
 曇

四季法樂

當園社中

松とて影を平 鳴り田々 可南
 秋を川下 心通る 和く嵐山
 すき通水 海の深き 雲の峰
 燈りの磯 小浅き 平なく 崎
 岸を平 飯平 暮に 酒を 哉

紫山
 寫涼
 梧秋
 此道
 青岐

白雲 和 風味も 雪平 等し 之 批
 佐野
 緑翁

井水の 影を 平 鳴り 田々 可南
 去る 影を 和 松 崎 の 眺 見 可 耶
 秋 暮 此 松 平 飯 平 暮 酒 を 哉
 夕白 平 一 暮 一 暮 一 暮 一 暮 一 暮
 松 崎 佳 子 川 下 心 通 る 和 く 嵐 山
 岸 を 平 飯 平 暮 酒 を 哉
 松 と て 影 を 平 鳴 り 田 々 可 南
 秋 を 川 下 心 通 る 和 く 嵐 山
 す き 通 水 海 の 深 き 雲 の 峰
 燈 り の 磯 小 浅 き 平 な く 崎
 岸 を 平 飯 平 暮 に 酒 を 哉

二春
 物橋
 夏櫂
 涼風
 孤頂
 簑蓑
 松花
 江山

須本
 志筑

のこし移平うち歎九歌の世に我
船息や離平持下成 芥 加妻
此の如く 画ももか洲凡 姑念背
寄 甲市のあ雁のりり 刺 各三
ほの月平 小庭の掃 際より危
真 去々 小洞ももか 於 之 融の角
くも 喘 一 き 時 日 も た 妻 担 かん 言
まうち 此 唄 の 高 子 よ 夕 月 夜
あま 自ら 平 明 て 御 小 野 菊 哉

斗大 芝玉 木涼 雨足 秋月 如泥 蛇毛 百羽 尺五

内田 安坂 廣田

今うねも又了之は夏常地表の敷
かま 屋もこもよ利 上も 雨の日
おの 明て 終る あり せ 利 細代
花を ねも 小 あり ち かな 洲 名 彦 雲
昔 進 歩 の う ち 妻 志 一 神 山 嵐
幸 行 の 口 平 碑 娘 巨 姑 標 角 角
ま 雀 衣 鳥 跡 走 之 以 や 薺 片 之
夢 之 如 翁 彦 妻 志 終 岩 乃 加 角
り 秋 中 祇 平 彦 廣 く 字 の 種

淇竹 耳筥 貫魚 伯民 花明 百翁 春野 千里 栗四

細 畑 檜原 浦 久孫 河内 馬廻

雲の裡をわち稚子為るか山也
新風平一はまみ草ふは川辺哉
新治を皆月の照る門田可耶
衣くは本は実れ秋を祭の庵
桐の如く平一はるよと等く礎か南

櫻並 馬雪

掃守

里真

和流

秋虹

兔橋

宗川

鳴門の舟かみをとをそめ

津井

蘆山

梅七

富泉

穴賀

花やあはれ舟に應る花葉をなほ鐘崎
天の河やうもやや月の丸くさきり
笑や帯てとち花を花の深見舟

春浪の底平一和布を叫火紅哉
さうはき花中ち桜花入日か南
幼遠を橋ああり 舟くさき南

阿万

佳木

之聴

杜橋

三日月や舟も玉細の目も蔵持

吹浦

楚山

曙の庵やヤホの花をさき

沼島

一千

山深一唯花を聲の布とさき

蘆来

踏ひの帯て釣はあ淵の柳か南
住持一菴もあ利の利一花は津

柳沢

言花

金毛

月如て煙山をけぬきつり

飄尾

月涼し松の影をまきし

琴塵

杉林をまきし

櫻尾

油多平う川甲て蘭のうら花を

我白

我信平生をまきし

鮎原

如果

やまねのや柳を備てなり

千古

あかしこほしをまきし

鳳翅

月涼し喜田をまきし

其白

漸寒やツ川をまきし

有聲

切ら平をまきし

群松

峠より入るる

谷水

白かり平持をまきし

可群

あらしをまきし

尾合

凧平ゆきをまきし

雨竹

赤橋をまきし

廣石

左水

さきまのや

津志

花郎

春の夜や暮りしおもふ雪の月
宋君も此吟をよみたる菴か南
管火もやいふも静けき芝の浦
琵琶の聲もあらず都の涼哉
善重の才はかくもあやむる
志雅菊はこころもあやむる
我情年相ひらき秋の香

素有
南風
申洲
浦玉
春木
樵山
大禁

西のうらみあはれ流るる此白ひ哉

松帆浦
無曇

春深くもはるけ神夜や雪の柳
月や籠蓮子竹葉山かき
序はこれ後子まほしき被る南
ながめおや誰も回らぬ喜信在
おや空しくも一齒を響く雁の声
空も志雅まじりて静けき
あし一跡や素の中を歩きり
以秋や水の上を歩き山の際
磯子も浪はうらみ入り日か南

五陵
茶隠
其州
久満女
如屏
馬演
阿鳥
其悠
帆丘

風や吹志川よりてなる潮
名雨の眼も清はま 雲おか 雑
お世せ戸此 少すの利 岩の角
神——く洲井ら 小康の起也

騎月
三枝
蘆荃
巴州

粉おしり 平其の能き後亦能く
あちむ世や 好風平 世の家世の海

玉屑

播州社中

ほ世のめれ 母寺か 産尼えん 舟婦人
世の業あり 我も角あり かげあり
一線もく 文音をう 短五月雨
此は雨も 花毛も 重なり 夕か雨
明星よ 小鴨 体も あり 田の 有
日傘も 衣襟の あり 春は 風
春州——あり 満ち 赤らん 谷
夕く 耕や 汐より かる 解中 の 谷

五齡
化凌
梅言
鷺山
起蝶
霞江
巢雨
竹雨

建る呼わくへ打も書礎の雅
鈴や井子ちの瓶を憂をなく

湖月
蝸國

早稲の鳥やハ情を互家ぬくみ

五喬

声のうそ平流運は入る空山櫻

五刃

葉の燕回飛く繩も懸れし利

奩寸

ほめくや室の戸叩くも川鯉

其良

折くきくまんとすも煙の蝶

帰木

海士のうそ平流運とて機月

可雄

如古川

花うらまふ嵐もあやの糸は九良
冬もや折くもまねくもれうへ
かま重なる空をまおりのよあけや産

竹圃
耳毛
青角

明のこねもれうへ流や呆居る
おのほしの星も吹寄る景を哉
夕白れをやむりへの糸は初
名もまよひも流浦のちりあふ
白蓮の存よかきる家さるる我

新野
風虎
脱負
葵風
流志
巴紋

廿九

田の角平 自らまきく 今市

今市

愚寒

浮きや なる洲 して 花さあけ

一樂

浪の音も 響りしや 月

花澄

有橋 一 危の 跡まきく 水のこ

雨柳

川越 して 川も 響りしや 月

右香

思ふく 生く 年 夕 存さ 如 池の 響

李冠

赤椿 咲く 所 拙 事 存 中 家 九 角

紅涼

姉 中 丸 亞 あり 洲 たり 魏 臣 里

思問

暁 なく や 石 見 ぬ の 気 元 け 長 人

右契

舟うして 庭も 畑も みの 月

布舟

毛の 湯 世 松を 尾 け 秋 帯 一 ぎ

荒井

東圃

襟 鳴 や 片 按 年 の 雪 舞 け 雪

湛露

大庭 や 去 の ひ て 踊 る 冬 花 月

如草

棧 や 丸 舟 を 後 舟 水 の 舟 し

冬柳

此 以 の 樽 紅 樹 や 世 元 の 気

淇筍

新 の 元 ち あり 色 を 存 ころ 心

魚崎

常和

冬 病 丸 あり 終 事 の 一 丈 草 丸 角

憐鵝

おしき 山崎のふるきをよむ

上田

稚巾

雛の日 千 鳴きよ 橋本の柳きき

雪柱

きく 奥や 強河 細子の 養北 春

磨雪

る 繁う ちと しく 弦子 市や 花

梅明

須平 神 秋 屋 西 風 角

馬槌

きの ちと ちと ちと ちと ちと 日 陽 哉

田旭

山崎 千 ありて

斎 一 さや 花 ちと ちと ちと ちと

小野

君中

みの ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

朝妻

稻海

傘 千 水 ちと ちと ちと ちと ちと

繁昌

螢溪

その 月 ちと ちと ちと ちと ちと

一馬

おき ちと ちと ちと ちと ちと ちと

劔坂

米五

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

新所

五草

花 氏 ちと ちと ちと ちと ちと

竜野

外菊

花 ちと ちと ちと ちと ちと ちと

揖流

袖 ちと ちと ちと ちと ちと ちと

十洲

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

赤穂

白岐

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

那波

嵐外

新戸もや、拙る今の若は菘の秋
妻さう川、推のささり、堂この南

佐用

馬肝
模亀

か古のつりおの
出は菴くも越るひさゆ

林田

雨人

十の世や、首の川の守、流流、高
維の雲もなや、言根の、新朗

暮蛤

うらも、あふ、あま、日、く、は、て、る、川、橋

花朗

おし、せ、れ、星、吾、を、ひ、お、除、お、の、言

北花

妻の月、少、和、を、浅、く、は、の、人、能、色

尼女

香蝶

く、免、お、ま、て、橋、千、越、お、踊、る、哉

智三

伊、家、も、や、炭、の、な、の、れ、も、何、あ、ま
如、月、や、世、を、降、か、ら、か、る、ゆ、は、た
名、有、お、掛、ま、ま、く、く、利、古、ま、の、松

画佛

李雨

野上

在明石

おの、世、も、や、葉、の、小、田、孔、む、る、鳥
な、ま、ま、ま、な、ま、な、の、砂、の、上

樗雲

瓜坊

但州社中

生野

サ、ル、も、や、世、の、ま、ら、所、ま、て、な、く、水、翁
よ、は、お、ま、て、志、を、も、持、は、る、ま、の、秋

松童

袴仙

あまの栞^千一^乱た^く妻^を此^を我^と
白^くく^と去^りく^はや^る母^を救^ふの^栞
元^山始^に居^る音^や青^はる^る
お^くは^な千^一子^をお^く遠^き哉^と
さ^しと^もや^柳を^歌お^くは^る担^の
う^ち眠^る浦^の京^をや^おる^月
う^らは^す千^一後^千命^の起^る音^を
お^くな^りく^は元^の新^白志^を急^に
お^くの^峰一^好ま^り哉^と公^利後^に

諸香
市隱
百盧
文細
涼秀
爽潛
和石
如竹
登那女

遠^山の^山し^を見^る眼^か我^と
賊^くな^りく^は月^の櫓^の角^を
く^免の^香の^庭あ^るて^機月^を
存^える^も栞^を此^を家^か那^と
沢^山よ^なり^てく^はお^くの^道
く^免の^山北^に通^る一^畑の^千
乃^やあ^る母^を路^を鏡^をの^夕煙^を

大養父
至峰
謂庸
野牛
春紅
大路
馬北
逸坡

壺西^の花^を吹^るる^るの^原

西ノ下
尚古

障子屋弓は月色春より夏
 白梅北曙月深く暮花夕利
 山峯の花夜明鳥もあり（注）
 喜山風そけの渾多よおの吻垣
 風名せんく水鶴のさお間の宿
 柳幅や二月の夜半二交入る
 五つ山連は粟津のかやり（注）
 五月くや若原ふよから新の月
 卯の三夜や松垣千雲の夜かふ
 朝暉
 桃兮
 朱年牛辺
 放有
 僊只
 柳芽
 石路
 父介
 一路

多形しを捨てて又折る花跡か歌
 青きや風のるうつた水の月
 春のやよの種ふか山折交
 入月の空をまてあや月吻の書
 春よよひ佛洗ん水の色
 片さるるこれ別ありあり種の花
 有るして構の白ひれ物文の刺
 夢の轉らり写つらよの騷り文
 牡丹芽をぬまて是生み実のふ耕（注）
 土居 如流
 城崎 長圃
 豊岡 髭風
 南花
 由璉
 梅國出石
 李天
 月波
 一志

花より千香もあつし耕川峰の荒
梅檀の香よりほの光る花を思ふか歌

左彦
梧堂

諸國文音

老らき月ももくしきこも月系可曲
眉仰く白くおちし種め風
しるや花なちりし三軒家
色きぬこ一里をりしお花
池より去りし成りしお実哉

京
蝶夢
八董
百池
定雅
正巴

名月や花あつしのおちし耕川
神をくちりし系をや花より
系をくちりし系をや花より
まじ甲斐のあつしなよふまの梅
雛の花基花れしよまの耕川
春は花もこれして遠きより
梅より大根千より梅の寮
夏は花のなつしおちしお花より
小田の月花よりし眠りより

菱湖
之兮
春坡
巴陵
葵
其成
泰溪
紫暁
闌更

花と能めきつくとちの処日と常也

江戸

白雄

有明や空のありをな石の書

成美

書と世男の一ちりひまむ野梅哉

吹石

持こしれ酔ふ嗅之利一団此梅

舎羅

雛子の尾より見れさし山路か形

寸羅

杉の雪杉の白庵友おけ生利

完未

書寒しし雨漕りおちちみ

在江戸

遅月

百ふるぬとらむり文林の角

雨銘

牛か甲とまわけてんや浪廣の石

重厚

友川のまへんて居た居た可歌

浪花

尺艾

蠟燭ちり年ふ新蠟の契りか角

旧國

蘭の香や我羅よの裡きう川

間山

くちやま川一舟の居れ哀なり

升六

涙りしは寒き氣候きねおのる角

銀櫛

山田よれ静しぬるふれ鞋の雛

一瓢

妻の存着れとるくちの由

鳳御

梅妙は回る水執して言れ自

麻介

狼牙馬すみえ子元すき

持室

花もりの新葺かおれ二月哉
 人多く庚申空や春は秋
 麻の聲も笛も通ひてあそび
 了しあそびも終へて去りて
 又神もさふ人なりあそびの
 六日目やふとよ病後の務角力
 春の月上もあつれゆ女の唄
 多れ見やたらしく思の柳の毛
 大空も旭をなす帰るる

沙月
 甫風
 呉雪
 芝風
 東屋
 仙興
 耳三
 無節
 市人

田ひ形おるは其日や帰るる
 酒をなすを春も
 去る粥も身をなす
 主水もなす老より氷室あり
 夕鳥やさくさくさす
 稲の香も吹や祭の膳は
 けくろいぬ跡もあはれ
 白浪や芦も福もあはれ
 燈火の稲もあはれ

野霍
 二柳
 沂風
 一萍
 巨洲
 十影
 五来
 蜃洲
 蜃邦

多しきくし 弟碗なる先世科の身
 抄くまに遠山なる姑く移りか歌
 かんけいの 碓氷をなほ好先世
 算 神龍おより 乱れし風の層
 於常り 嘯く駒の志あくる雅
 空ちりく 雨の 於息 嘆きし利
 一面り くら 紫んを 喜嵐
 甘き梅を 妻り 古ふ日 和の南
 海入る して 木の 石を 志す 進危

愛知川 飯興
尾州 士朗
 羅城
房州 曉臺
 楚流
遠州 涼花
 白輅
 果月
 徐生

昔の所り 伊勢の 貴家なる 文
 本とく きは 忠誠の 胸に 酔いしら
 平生 志 始り 抱き ち 歌
 さく 拵 中 流を 越して 水 流ひ
 白鷺 此 三つ 羽 ち 言 あり 一
 ち 唇の 月 能 友と 村 経る 於 樟の 角
 路 ち け や 葉の 花 咲て 又 遠し
 雛 頭 の 左の 佛 一 言 の 菴
 柳 花 散り 此 あり 拵 ち 四 川 於 寒 哉

冬州 木朶
勢州 弘臣
着州 竜石
丹後 貫厄
丹後 支百
峰山 其白
 きん女
岩滝 一釣

陽をや海をく人き新紙のう人
 生垣も垣もやあらん瓦の雪
 青風や流るの夜伊勢のぬき
 草花の化や小瓶福や畑の縁
 舟をてふはる新千あなや夕島
 奥も三子江も中あはれは月を云
 山風や吹ちるき新て海り多
 亭の月や日和空もあきる空
 花もさくみしうま春の三月哉

、宮岸 冬扇
、丹波時雨 晴峰
、善光寺 柳莊
、甲州 石牙
、越後 桃路
、信上田 和人
、裸木 裸木
、寒口 寒口
、跨山 跨山
、凌二 凌二

春の糸き新て春のねも云
 花や生妙存日も水のうへ
 おもひはのち川雷や梅もり
 舟もや流るくま白木檻
 越く舟や庭の杉乳穂をのち
 鈴もきくあはれをきまふ二人の舟
 おの雛もこれ庭をたかまふ利

秋風や弦をひき知れ侍の侍奉
 奥白石
 鬼子

陽そやほろこし濁世を乃多麻

仙臺

東臯

乃多麻如我や丸と世の頂テの

仗宮

鶴くても子供あ川さか秋のこ流

南ア

素卿

牡丹咲て九日の乃多みそく歌

津怪

化石

白梅やとりし水結序あき記

羽川左岸

露橋

新風や魚さうなまふ心産の海苔

薩ア

完尔

みくし郎や何をち推さん喜音

肥後川尻

文暁

朝のあや知か新くみほきて白ひ危

山麻

浦蝶

棠をさうらて浮雲ふ並婦小鴨哉

尺屈

種さくもちのなまよのを墨玉粟の之紀

熊府

嵐開

涼しよやおりもなも水のとも

筑後

可美

おしし世や家をのそけと月白

日向

我樂

日影雲しし郎さの朝れ春の垣

備後三原

五明

撰層や又まのたぐ草あのかか菊

備後三原

土芝

釣舟や存年無辨を存年月

福山

何笠

種ゆゑるふ雨りし世は終世し

福山

松子

龍おや刀り明しき良の雛伝

藝廣島

凡十

石菖蒲水あうまけの白ひうら雨

蘭洲

是白より新もく川程は路中哉 川尻 東升

春柳の波たうのたうて集うの事 備中望岡 文里

春あさくちらほちくし利雪のすき 高松 春山

月をくし柳焼くし春らむと津島 高松 頼石

梅白梅かきや扇の長谷あまり 女 哥童

あそびたふ二日の月やなまき 肥前大村 楚畔

菖草耕くし入るく措のつら哉 神代 後翅

おの花女たちのうてなまき 長崎 春喬

きりくくはあやや夕日の種茄子 長崎 車文

おの峰あまきくくけて海より入 津島 字漱

み川や水をとる耕し石高産 筑前 依兮

海の白はあやなみしを春の色 長崎 繡戸

みか耕や西日さくく狐穴 豊杵築 蝶醉

浅川や何ふうくちて春の水 豊杵築 菊男

漏る種より入の白みや春の雨 伊賀上野 杜由

たうのくくく梅はくれまうとら梅 伊賀上野 維夢

春を春る路中のかたきうとる哉 伊賀上野 五右

春を春る路中のかたきうとる哉 伊賀上野 五明

詩を月や日の隈からそむくま

柘植

杜音

松風の井もきくつゝを浦の秋

阿波

馬未

葛水や嫁の成る海の初り年

南濱

紫の戸や春をききのしを麓

泉坂

不伐

糸所を良しきる老木の角

紀州

喜齋

風の山をくまうくおきこの角

能登

鬼雀

玉うす糸むのふ鏡やまら良乾

如賀

夕遊

古の海をむ木のありし四月の角

武嶋崇

佛仙

ゆりのるまを洲川なるはれ初角

柳也

哥僊

我の馬をさる海をた乃まを雨の角

青蘿

く川にまをしかをれ維多を水難子

玉屑

秋をを供奉 秋多透は能登洲て

月を川を月の空をく洲 雲

蘿

ち度くくたをそ花の咲か

小鉄を秋年 実を安の秋

屑

又斗糸年かて野巾を打か
醉をかえね似味の
ぬらまきふ糸を推糸小く
との代糸年一ちんて押さ
化智婦一裡の糸糸糸糸
池の糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸守糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

むらふれ糸糸糸糸糸糸
糸の眠を糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
長糸糸糸糸糸糸糸糸糸
世の糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
景糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸

赤穂人の情を承け、
 夷情笛の遠音想へて
 是れを承け、
 鉦鼓を切らば、
 其れを承け、
 追討の事、
 時をたき、

羅 屑 羅 屑 羅 屑 羅 屑

今に見よ、
 幸もなき、
 笠も利、
 雲も引、
 是れを承、
 其れを承、

羅 屑 羅 屑 羅 屑 羅 屑

運来 家千世

寒月や憊きよき庭に水のねと

撰難

士川

志をくくしむるひ庭の夜空を

池田

九言

知る年老をらん世有る風花か南

武嶋集

皇府

秋夕してあまの山をみれば鳥の雛

須中

皇雨

三琴もや歌ひをきぬ糸のうら

須中

席洞

澄海一もやまのつぼの浦に

抱きえらひあくる日く翁の墳墓

を築きよきあまのし集を地

むこひおたりひまこし句を勧進

泥より玉屑法師一也既

也一威し梓りはしと及ひ

予一也一跋をきよしと

志

車一實周録々序詞——祥
あれを言を——————
集の名をしす————
新波の旅寓の————
幾董書之

巳酉癸十月十二日

